

(別紙様式2)

普及指導員調査研究報告書

課題名：ナス青枯病防除に対する防除効果の実証とこれを契機とした産地の活性化

周南農林事務所農業部 担当者氏名：朝山 哲也、尾崎 篤史、棟居 祐子

<活動事例の要旨>

- ・ ナス青枯病防除対策を契機に、産地の活性化を目指した。

1 普及活動の課題・目標

J A周南管内では熊毛、徳山地区でナス栽培が盛んであるが、両産地ともに青枯病の発生に悩まされ、接ぎ木苗やほ場ローテーションで回避に努めてきた。しかしながら、土壌の跳ね返りによる穂木への直接感染を防ぐことができないため、慣行苗より接ぎ木位置が高い「高接ぎ木苗」における防除効果を確認する。

また、両産地が本実証ほを展示ほとして活用し、合同現地研修会を開催することにより、産地間の情報交換を図り、産地の活性化を図る。

2 普及活動の内容

(1) 実証試験

ア 試験場所

周南市大字樋口 A氏ほ場

イ 供試品種

(台木) 台太郎、(穂木) 筑陽

ウ 接ぎ木の種類

高接ぎ木(接ぎ木部位 6.3cm)、慣行接ぎ木(4.2cm)

- * 接木・育苗は育苗業者が実施し、納品(9cmポット、3/13)後は、生産者のハウス(電熱マット25℃)内で管理し、最終的には12cmポットに鉢上げした。



図1 高接ぎ木(左側)と慣行接ぎ木(右側)

エ 試験期間

- (ア) 高接ぎ木：定植 4/22～11/12
- (イ) 慣行接ぎ木：定植 4/30～ 11/12

オ 区制

2区20株、3反復

カ 調査方法

- ・ 1ヶ月毎に萎凋症状の有無を調査し発病株数から青枯病の発病株率を求めた。
- ・ 初期生育を確認するため、定植2ヶ月後までの草高を計測した。
- ・ 各区10株を対象に全果実重量を調査した。

(2) 産地交流・活性化

農林総合技術センター、JA周南との連携の下、JA周南熊毛ナス部会、徳山中長ナス生産部会を対象とし、2回の合同研修会を実施した。

ア 青枯病・褐紋病対策研修会（8月8日）

(ア) 青枯病

- ・ 青枯病激発農家が両産地で増加した。
- ・ 剪定ばさみの消毒等による拡大防止対策と薬剤散布について指導した。
- ・ 高接ぎ木実証ほの状況報告と台木について指導・検討した。



図2 青枯病・褐紋病対策研修会

(イ) 褐紋病

- ・ 近年発生が拡大し、25年も梅雨時期に初発が確認された。
- ・ ①梅雨時期の防除の徹底が必要であったこと、②8月下旬以降の対策について指導・検討した。

イ 土壌消毒研修会（12月4日）

- ・ 青枯病・褐紋病対策の1つとして農技センターが実施するクロルピクリンによる冬期間の土壌消毒現地試験を合同研修会として位置づけ、土壌消毒の方法・効果等について指導・検討した。



図3 土壌消毒研修会

3 普及活動の成果

(1) 実証試験

ア 青枯病発病株率調査

- ・ 平成24年度の調査では、トルバム・ビガーの慣行接ぎ木栽培で青枯病発病株率が79.2%であった。
- ・ 今回の調査では慣行接ぎ木区、高接ぎ木区ともに青枯病の発病は認められず、高接ぎ木栽培の防除効果は判定できなかった。

表1 青枯病の発病株率

	5/13	6/13	7/12	8/8	10/1	11/12
高接ぎ木区	0%	0%	0%	0%	0%	0%
慣行接ぎ木区	0%	0%	0%	0%	0%	0%

イ 草高調査

- ・ 茎長は、定植1カ月後では高接ぎ木苗が有意に長かったが、定植2カ月後では、差が小さくなった。

表2 草高調査結果

	5月13日	6月13日
高接ぎ木区	50.4 cm	104.7 cm
慣行接ぎ木区	44.7 cm	101.0 cm

ウ 収量調査

- ・ 収穫は、高接ぎ木区が5月22日から、慣行接ぎ木区は5月25日から開始した。8月の収量は、高接ぎ木区より慣行接ぎ木区の方が顕著に多かったことから、栽培期間中の全重量は、慣行接ぎ木区が134 kg、高接ぎ木区が123 kgと慣行接ぎ木区の方が多かった。

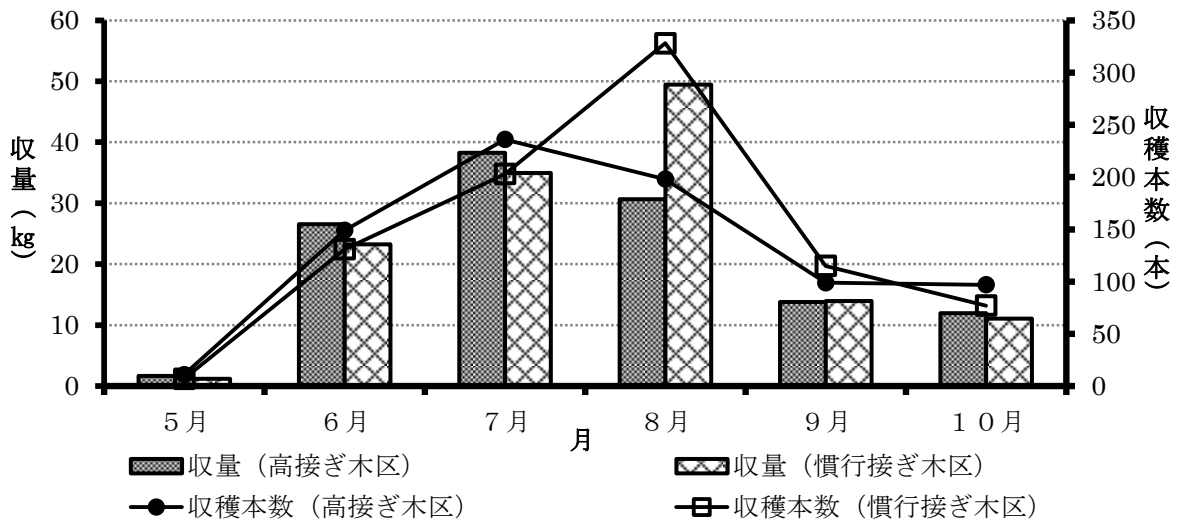


図4 収量と収穫本数

- ・ 7月6半旬の降雨後の8月上中旬の高温・少雨の影響で、なすの樹勢が一時的に弱り、特に、高接ぎ木区の方が影響があったように見受けられた。このことが8月の収量低下に影響した可能性がある。

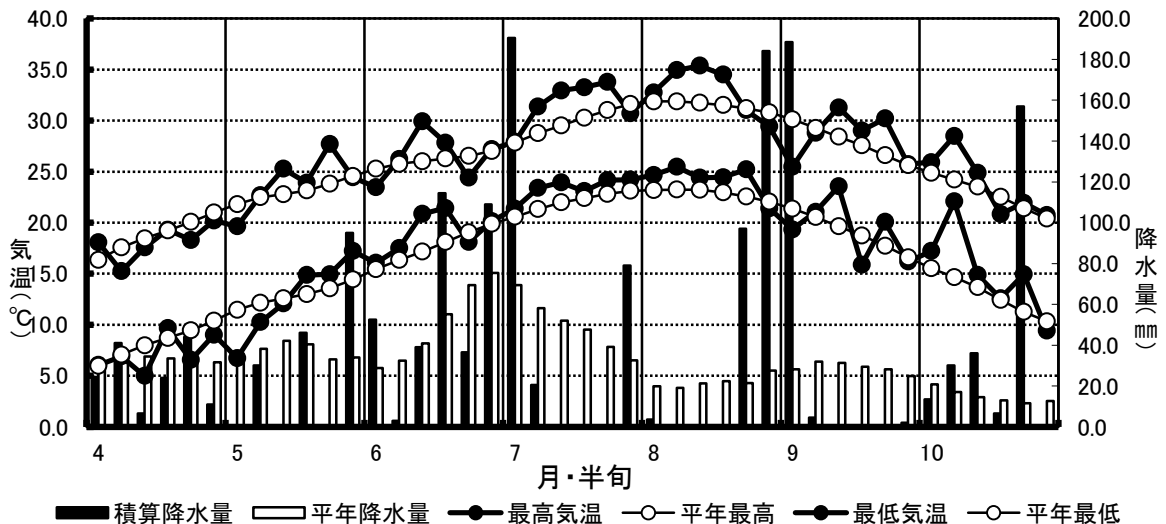


図5 平成25年度アメダス下松の状況

(2) 産地交流・活性化

ア 合同研修会を踏まえ、両産地では病害対策を共通課題に位置づけ、検討を重ねた結果、26年から次の対策を実施することとした。

(ア) 青枯病対策

- ・ 台木をトルバム・ビガーから台太郎へ変更する。
- ・ 農林総合技術センターによる高接ぎ木苗・多段接ぎ木苗（トルバム・ビガーに台太郎、穂木の順に接ぎ木した苗）現地試験を両産地4か所で実施する。
- ・ 穂木からの侵入防止対策として器具の消毒を徹底する。

(イ) 褐紋病対策

- ・ 6月から効果が期待できる薬剤を組み合わせて防除を実施する。
- ・ 農林総合技術センターによる土壌消毒現地試験結果を踏まえ、26年以降の土壌消毒の実施について検討する。

イ 合同研修会や検討会により、病害対策への意識の向上を図ることができた。

ウ 徳山では部会員の掘り起こしにより26年から1人、熊毛では27年から新規就農者が1人、新たに栽培を開始することになり、産地の活性化が期待される。

エ JA周南は、量販店との相対取引（120円/500g袋）を実施しているが、産地の支援強化策として、新たになすの買取り販売により生産者の袋詰め作業の軽減や手数料の撤廃を図ることを計画しており、生産者は今まで以上に安定した経営が期待できる。

4 今後の普及活動に向けて

(1) 台木の変更

- ・ 台太郎はトルバム・ビガーより草勢がおとなしくなる傾向があるため、1番果での初期生育のコントロールについて指導が必要である。
- ・ 台太郎は青枯病全レースに抵抗性を持つが、半身萎凋病に対する抵抗性を持っていない。トルバム・ビガーは青枯病レースIVに対する抵抗性を持っていないが、半身萎凋病に対する抵抗性を持つ。26年はベンレート水和剤による土壌灌注で対応するが、農林総合技術センター現地試験における多段接ぎ木苗の現地試験結果を踏まえた上で、台木について再度検討が必要である。

(2) 褐紋病対策

- ・ 梅雨時期からの防除及び土壌消毒は今まで実施していないことから、コスト増を心配する声も上がる中、収量増での対応について実証する。

(3) 新規栽培者への指導

- ・ 新規栽培者を重点的に巡回指導することにより、産地の底上げを図る。